

伝統的な客家三合院の現在の住まい方 (台湾新竹県の場合)

鳥飼 香代子・呂 幸蓉*・蕭 玉燕**
・ウェイ ポール***・林 敬峻*

The Living Style in the Traditional San-Go-In House
by HAKKA People (Hsin-Tsu Prefecture, Taiwan)

Kayoko TORIKAI, Hsinjung LU, Yuyen HSIAO, Wei PAUL and Chingchun LIN

Abstract

The Hakkas is one of the HAN Chinese, same as the immigrants from Min-Nan; however the Hakkas have different customs of their own. This has made the different compositions and the different usages of the dwelling from those of Min-Nan people. This paper aims to find out the living style in the traditional San-Go-In house. Main conclusions are as follows:-

1. There were three or four married couples in each traditional San-Go-In house. There are rules of where the eldest couples should live in.
2. There was only one kitchen shared for about 50 peoples in the agricultural period, but two or three kitchens increased in modern period.
3. The kitchens were renovated from the vacant bedrooms, as the children left home for school or work.
4. All people are passed away or moved to other houses, and the family memorial tablets are left in the traditional San-Go-In house.

After the eldest family took the family memorial tablets to their house, the traditional San-Go-In house was abandoned. The traditional Hakka San-Go-In house were located near the mountains, therefore the speed of the occurrence of the vacant rooms and abandoned houses were so rapid. This is the history of the traditional San-Go-In house.

Key words : The Traditional San-Go-In house, Three or Four Married couples, The family memorial tablets

1. はじめに

1-1 研究の目的

漢民族による台湾での本格的な開拓及び農業経営が始まったのは17世紀初頭からである。その開拓初期における中国本土から台湾への移民は、ほとんどが閩南系(福建省)と客家系(広東省, 福建省汀州)の漢民族であった。客家系の台湾への移住は閩南系移民より少し遅れて1680年代以降のことである。それ故、沿海部及び平野部では閩南系移民が優勢を

占め、遅れてきた客家系移民はやむを得ず内陸部や山間部に定住することになった。

日治時代が終わった後の最初の本格的な調査である1956年台湾人口調査によると、台湾全島の総人口は815万人あまりであった。その内、閩南系移民が最も多く約691万人と、総人口の84.8%を占めている。一方、客家系移民は約122万人、総人口の15.1%であり、その6割は山地の多い桃園、新竹、苗栗の三県に集中している。なお、2004年台湾行政院新聞局の台湾人口調査によると、台湾全島の総人口は2265万人であり、その内、客家系移民は約608万人、総人口の26.9%を占めている。新竹県にいる客家住民は全県の75%を占めていて、全国第一客家大県と呼ばれている。

* 熊本大学教育学部家庭科(住居学) 研究生

** 自然科学研究科博士課程後期, 台湾南榮技術学院講師

*** 熊本大学教育学研究科家政学(住居学) 専修

閩南系と客家系の移民による伝統的な住居は独立式の三合院、四合院と、連続式の店舗併用住宅（街屋）の2タイプに大きく分けられる。閩南系と客家系の移民は同じ漢民族であるが、互いに独自の風俗習慣を持ち、それぞれの文化を形成している。それ故に同じ住居形式が用いられても、その風俗習慣の違いにより、空間の構成や室の使われ方が異なっている。

しかし、閩南系と客家系の合院住宅形態をその社会的、文化的背景を視座に入れつつ建築計画的視点から体系的に論じたものは極めて乏しいと言わねばならない。少数例に基づいた事例的報告はあるものの断片的なものに止まり、かえって閩南系と客家系の合院住宅形態が混同される要因ともなっている。以上の現状を踏まえて、本稿は新竹県の芎林郷、北埔郷、湖口郷（図1）を選び、客家系の三合院（客家人は「夥房」と呼ぶ）を対象とし、その住居空間の構成及び室の使い方の特性を把握することを目的としている。

1-2 既往研究

台湾街屋に対する研究は様々な視点から進められてきた。しかし、その多くは街屋の外観に注目し、特に亭仔脚（アーケード）に関する形式の変遷、法令の考察、ファサードの特徴及びその意匠の変化などを扱ったものである。

その他には、沿海地域の大都市に分布する街屋の発展過程、空間構成に着目した研究がある。さらに、近年では、街屋の保存、街屋の社会的構造、街屋の集住と管理などの問題について論じた研究がある。その台湾街屋に関する研究の中に、合院住宅はすこし紹介されたが、閩南系と客家系の合院住宅形態が混同されて、紹介された。

一方、台湾を全島の視点から見た場合、沿海地域

の大都市と山間地域を比較すると、街屋には明らかにその「地域性」が存在している。その「地域性」は、気候風土などの自然的要素、開発過程などの歴史的要素、またそれにより規定される生産形態、家族形態などの社会（経済）的要素、さらに風俗習慣などの文化的要素に大きく関係している。しかしながら、これまでの研究ではその地域性や民族的風習にまで視点が及んでないのが実状である。それ故、本研究は客家の伝統的な三合院を対象とし、三合院型客家住宅の現在の住まい方について探ることを目的とした。

2. 調査概要

2-1 調査対象と地域

新竹県には客家住民は75%を占めているから、本調査は、山間地域に多く分布する客家系合院地区を取り上げ、その中で伝統的合院住宅が多くかつ保存状態が良好であり、客家系合院住宅を考察する上で格好の資料を提供してくれる可能性の高い地区に注目した。さらに、現在なお客家が多く集住し、客家系合院住宅の形成・変容に関する地域的、民族的傾向が把握できる地域に焦点を絞った。その結果、新竹県の芎林郷、北埔郷、湖口郷を調査対象として選定した。

新竹県は台湾の西北部に位置する。北は桃園県、南は苗栗県、西は台湾海峡、東は雪山山脈、大霸尖山がある。新竹県は3方を山に囲まれ、土地面積は1,427.5931平方キロメートルで地形は東南部から西北に向かって徐々に低くなる。新竹県管轄は13の郷鎮市があり：竹北、竹東、新埔、関西、湖口、新豊、関林、横山、北埔、宝山、峨眉、尖石、五峰。県内の人口は、客家人をメインとして、閩南人、原住民、そして科学技術、商工業に伴って移ってきた住民など、多元で融合し合った民族構成と、矛盾すること

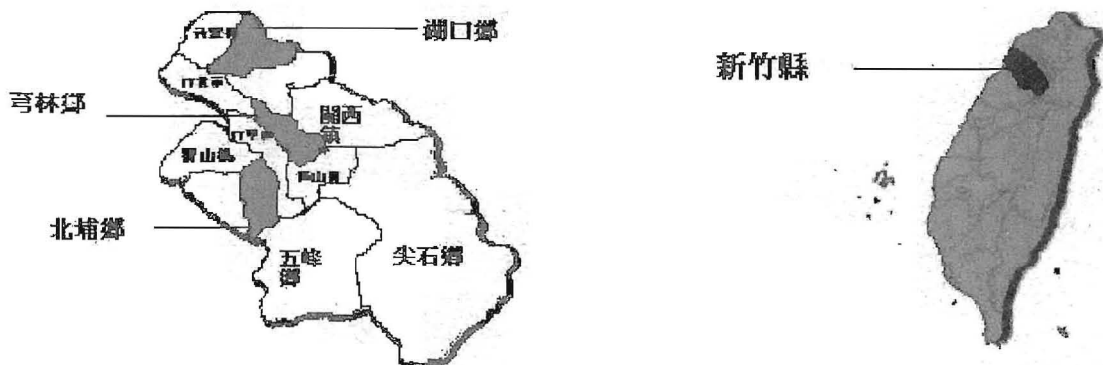


図1 調査地区

のない文化特色を形成している。

芎林郷は新竹県の中央の西に偏り、人口は20,549人であり、面積は40.8平方キロメートルで北一南に傾くの丘陵地帯である。水源は十分で、農産生産基地であり、米、蜜柑、梨、茶葉などは主要な農産品である。客家系住民は90%以上を占めている。

北埔郷は新竹県の東南部にあり、人口は10,538人であり、面積は50.667平方キロメートル、東南一西北に緩やかに低くなる丘陵地形であり、干作物または茶葉、フルーツなど本区主要な農業商品である。「東方美人茶」の名で知られている。客家系住民は98%以上を占めている。

湖口郷は新竹県の北部にあり、桃園沖積扇状地の南端の湖口台地に位置する。面積は58.43平方キロメートル、人口は71,873人である。農作物方面では、多種の干作または茶葉、フルーツなど経済作物を植え、商工業方面では、湖口工業区を主要な集中生産地として、伝統製造業のほか、最近では新竹科学パークの開発も行われ、多くのハイテクメーカーの工場が設置されている。客家系住民は91%を占めている。

2-2 調査方法

現地調査期間は、平成17年8月21日～8月23日の三日間である。戸別訪問による住宅平面の採取、調査紙によるヒアリング調査、建築の写真、部屋の写真、ビデオ撮影である。なお、現地調査は、三合院住宅の平面、立面の実測及び家族構成、住まい方、建築年代、増改築年代とその内容についてのヒアリングである。

3-1 事例 i

芎林郷「鍾屋夥房一穎川堂」



写真1 全体図



写真2 塀の外は段差があり、低くなっている。1室1屋根（床の段差なくても）

3. 住環境設備に関する考察

これまでの研究で指摘されている客家系三合院の特徴は、以下の点である。

1. 典型的客家系住宅は風水と外敵に対する防御の意味から、前には池、後ろには竹の林がある。
2. 外観はシンプルで、閩南系のような煉瓦色ではなく漆喰や土の色に近いものが多く、自然な色合いである。
3. 客家系住宅の屋根（身分の高い家族の場合、燕の尻尾の形が許されているなど、妻（妻の最上部は花頭の形など柔らかい曲線が利用されることが多い）、或は瓦鎮（棟飾り）など、屋根のデザインが多様である。
4. 壁面の構造：最下層は卵石造りの基礎となり、真ん中は煉瓦や化粧煉瓦張りに、上層は煉瓦の上に漆喰を塗ったもので造られている。
5. 閩南建築の場合、正庁には神仏を祭っているが、客家の正庁は祖先を祭るいわゆる祖廟である。
6. 正庁内の仏壇の下に必ず「土地龍神」（土地を守る神様）が祭られている。
7. 「土地龍神」だけではなく、「天公」（土地神に対する天の神）の祭り方は、閩南系が「天公」に上げる香炉を正庁のなかの、灯りを吊るすための梁、灯梁に置くのに対して、客家系はこの香炉は天の見える場所になければならず、必ず屋外に置かれる。正庁の戸の外であったり、塀の上であったり、中庭であったり、一定の場所はない。

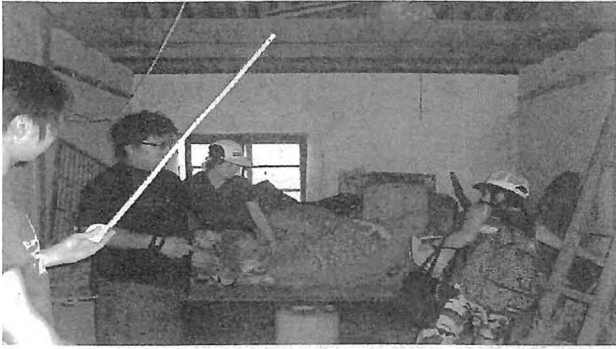


写真3 天井は板奥に机子



写真4 漆喰で塗られた室内、天井は板張り

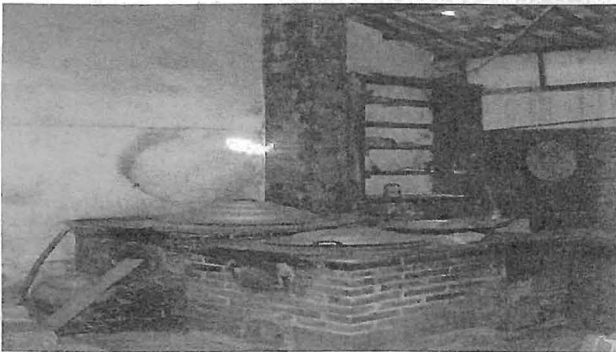


写真5 台所内部、木造のはりが見える



写真6 大型の鍋三つ分のくど煙突付、大家族に対応している

3-2 事例 ii

芎林郷「鍾屋夥房一穎川堂」



写真7 全体図



写真8 天水堂中心の正庁（祖先を祭る空間）



写真9 七品の位を持つ家 燕の尻尾の屋根が許される



写真10 排水口

3-3 事例 iii

湖口郷「隴西堂」



写真11 全体図



写真12 正庁内部



写真13 正庁、約50cm奥にはいつている



写真14 横から見た三合院

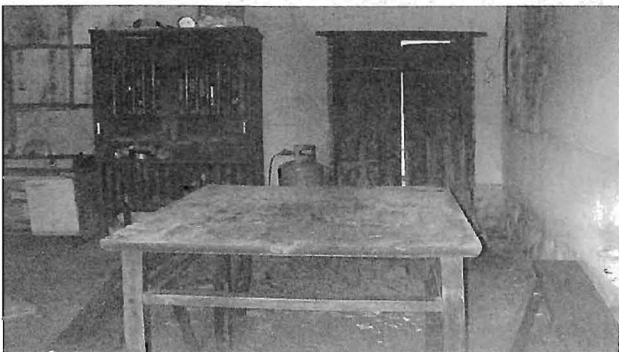


写真15 台所の食卓



写真16 房はアーチ式の廊下で繋がっている

4. 部屋の使い方に関する考察

—家族の変化と衰退の過程 (表1より)

4-1 「天水堂」

現在居住している世帯は3世帯であり、図2に示した各エリアを利用している。台所は共有、さらに風呂やトイレも共有である。各世帯がどのエリアを使うかは、新築時(おおむね100年ほど前)の家族構成に規定される。長男世帯は正庁の左側(正庁を背に)、次男は右側である。次の順位の世帯は左手前になる。もし長男が死亡或は転居してもこのエリアはそれぞれの世帯に継承される。したがってもし、

後を継ぐ世帯が誰も居住しなくなったときはそのエリアは、空きエリアとなる。現在この家族では、正庁左側エリアは空きエリアとなっている。現在も居住しているのは、次男世帯と3男世帯、4男世帯のそれぞれの子孫である。この住居では最大4世帯まで居住した歴史がある。それぞれの世帯は独立した庁(リビングなどの集まり部屋)と複数の房(寝室などに利用される部屋で基本的に複数の兄弟姉妹で利用)をもつ。食事は1つの台所で作り、家族全員が一緒に食べていた(共同で農作業をしていたため家計も同一であった)。しかし、近代化の下で、農業以外の所得を得るようになると、各世帯はそれぞ

伝統的な客家三合院の現在の住まい方（台湾新竹県の場合）

れ別の台所を持ち、別家計となる（これを分家という）。この家族では、現在3つの台所が確認される。新しく敷設された台所は、既存の房を転用した簡単なものが多い。

衰退の過程は、まず房に多く現れる。近代化の下

で教育を受けるとき、子供たちは房から巢立ち、学校近くの間貸しや寮に移る。また世帯の中心である夫婦の単位やその継承者が欠落したときは、新築時に割り振られたエリアが空き空間となる。この世帯は現在1エリアが空いている。

表1 調査の項目と事例別の回答

	質問項目	事例1	事例2	事例3
建物の概況	1. 家族名 2. 築年数 3. 構造 4. 中庭の日常的機能	天水堂 170 数年 レンガ造り ・直接神様がみえる・雨はお金・雨でお金をもらえ、土地も肥やす	隴西堂 80 数年 レンガ造り ・子供の遊び場・穀物干し場・披露宴の空間にもなる	穎川堂 約 100 年 レンガ造り 通風や光を確保
各部屋の利用内容	1. 正庁の左右の機能 2. 各部屋の機能 3. 客の寝室はどこか 4. 台所の場所はどこか 5. 風呂の場所はどこか 6. トイレの場所はどこか	長男、老人の寝室 房…: 寝室 庁…: リビング (参照図 2) (参照図 2) (参照図 2) (参照図 2)	長男、老人の寝室 房…: 寝室 庁…: リビング (参照図 2) (参照図 2) (参照図 2) (参照図 2)	末子がかわいいで、左房に住ませた。 房…: 寝室 庁…: リビング (参照図 2) (参照図 2) (参照図 2) (参照図 2)
禁忌	1. 台所利用時に禁忌されていること 2. 他の部屋利用時に禁忌されていること 3. 部屋の配置は特別なルールがあるか	なし なし なし	・結婚式、虎年の人は台所入らない ・棟上げのとき大工さんたちにご馳走する	なし なし なし
居住歴	1. 部屋数（房の数） 2. 何世帯が居住しているか 3. 最大何人住んでいましたか 4. 共用している場所 5. 各世帯はどのように部屋を確保するか 6. 男女別寝はいつから 7. 各世帯は血縁関係あるか 8. 伝統的客家は父系か母系か	約 22 室 4 世帯 約 30 人 トイレ、台所、正庁、庭 長男左房 中学校から 有 父系	23 室 3 世帯 40 数人 トイレ、台所、正庁、庭 長男左房、その他年長者の順番で 中学校から 有 父系	約 20 室 3 世帯 100 数人 トイレ、台所、正庁、庭 長男左房 中学校から 有 父系
建物の変化	1. 現在の居住者人数は 2. 現在の居住世帯数は 3. 現在の居住者の血縁関係 4. 居住者が離家していた理由 5. この建築は改築したことか有るか 6. もし改築したのなら、その場所はどこか 7. 一年間で、もとの世帯も含めみんな集まるのはいつか 8. 祭りなどで帰宅したときはどの部屋を使う	5 人 3 世帯 有 仕事 ある 台所、風呂トイレ、外観塗替えなど お盆だけ、年に一回 客間室を使う	2 人（夫婦） 1 世帯 有 仕事 外観なし 風呂近代化 旧正月 30 日夜 収穫際、端午、お盆 客間室を使う	2 人 2 世帯 有 仕事 1950 年土造からレンガ造りへ 寝室、台所 旧正月 30 日夜 収穫際、お盆 客間室を使う

4-2 「隴西堂」

横屋は正庁を背にした左側が3条、右側が2条の合計5条から構成されている。築80数年、新築時は3世帯が居住していたが、共同で農業をしていたため台所は1箇所のみで、共用していた。その後、職業の変化などから分家するときに2つの台所を増築し、現在に至っている。現在は次男夫婦世帯のみが従来からの次男世帯エリアに居住している。後は空き室となっている。この家族は一年間で4回、元の世帯同士で顔を合わせている。具体的な行事名は旧正月、収穫祭、端午、盆である。祭りなどの帰宅時に使う空間は、もとのエリアではなく、客間である。その理由は、筆者らの観察であるが、利用されていないための荒廃と掃除の大変さである。また、残された家具の配置なども、利用を前提としていないことから、短期間の帰宅への対応は考えていないとみなされる。

4-3 「鍾屋夥房一穎川堂」

山の中腹に建てられた住宅。一部を山の段差を利用して、正庁そばは一階建てだが、正庁を離れるにつれて、2階建てとなる。現在居住している世帯は1世帯であり、正庁を背にして左手のエリアを使っている。然し、一年に4回は家族全員が集合している。

具体的な行事名は旧正月、収穫祭、端午、盆である。そのときの利用場所は客間である。使われていない房の荒廃は進んでおり、天井や壁の崩落や一部欠落が見られる。

5. まとめ

住まい方にみられる特徴と、住宅の衰退の過程をまとめる。

- ① 各世帯（一夫婦とその子供たちで構成）がどのエリアを使うかは、新築時の家族構成に規定され

る。長男世帯は正庁の左側（正庁を背に）、次男は右側である。そのエリアは代が変わっても継承される。したがって、なんらかの理由で、その世帯の継承者がいなくなった場合はそのエリアは空きエリアとなる。

- ② 農業時代に1つの台所で作り、家族全員が一緒に食べていたが、近代化の下で、農業以外の所得を得るようになると、各世帯はそれぞれ別の台所を持ち、別家計となった。これを分家と呼んでいる。
- ③ この当時、台所などの空間がこれまでになく複数必要となったが、新たな増築はみられなく全て、「房」の改築で台所を確保している。この理由は、ほぼ同時期に、「房」を利用して子どもたちが、進学や就職のため、「房」から巣立っていったからである。そしてその後は子供の巣立ちにつれて、「房の空き室化」が進み、「房の荒廃」へと結びついた。今日では、高齢となったどれかの世帯の継承者が一組かろうじて住んで、祖先の位牌を守っている状態である。
- ④ この後であるが、住まい手がいなくなっても、祖先の仏壇だけは残して、一年に何回か、空き家となった住宅へ家族全員で集合する場合もある。さらに、住居の一層の老朽化が進むと、多くは長男世帯が祖先の位牌を引き取り、この住宅は放棄される。以上が、家族の変化と衰退の過程のまとめである。
- ⑤ 客家住宅は、閩南住宅と異なり、多くは山間部に位置する。そのため、近代化の影響はゆっくり現れたが、学校や就職先から離れていることが多く、通学や通勤が不可能なため、急速に「房の空き室化」が進み、ひいては放棄住宅が多く出現している。この点も客家住宅の特徴である。

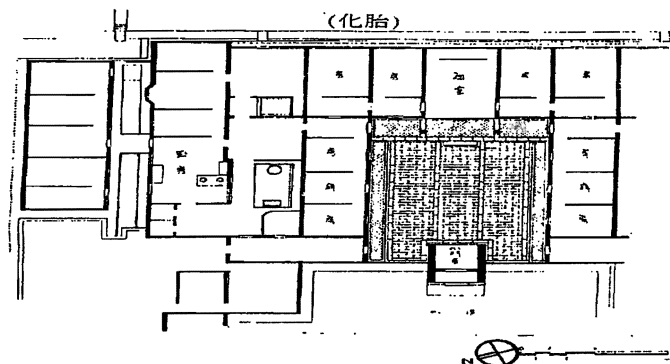


図2 (天水堂平面図)

参考文献

1. 林会承：台湾伝統建築手冊，芸術家出版社，pp.17～125，1995
2. 莊興惠：芎林郷志，新竹県芎林郷公所，pp98～141，2004
3. 邱彦貴，吳中杰：台湾客家地図，pp114～117，2001
4. 蔡榮光：新竹文献第11期，新竹県文化局，pp83～107，2002
5. 轟志高，玉置伸吾：台湾の新竹県の客家系街屋（店屋）住宅平面プランについて，日本建築学会計画系論文集 第490号，pp145～154，1996年12月